

時は無限であるか。

誰かが始まりを認識した時、その始まりは他の誰かにとつての途上に過ぎない。

また誰かが終わりを自覚した時、やはりそれは他の誰かの経過でしかないのだ。

有限である始まりと終わりがいつまでもそこかしこで繰り返される限り、本当の最初、本当の終わりと云うものは誰にも理解し得ないのだろう。

故に時は無限であつた。

しかし、今やそうではない。

始まりを知る事はもはや不可能だが、終わりを知る事は可能となつたのだから。

生命の時間、星の時間、銀河の時間、宇宙の時間、時の時間。それら全ての時間と付き合いきれるだけの、えもいわれぬ永遠の時間。

無限の中を永遠で居続けければ、それは、終わりを知る資格を有するに十分と言えるだろう。

最初は単なる知的好奇心。

ただ、その好奇心を抱いた貴き姫は、類稀なる行動力と実行力で、それまでのほぼ全てを引き換えに、永遠と共犯者を手に入れたのだ。

嗚呼——後はただ在り続けるばかり。

「ま、やめておけばよかつたと思わなくもないけど」

「はえ？」

永遠亭。兎が小騒がしい程度で概ね静かな屋敷において、ふとした蓬萊山輝夜の呟きに、鈴仙・優曇華院・イナバは思わず聞き返していた。

「ん？」

だが不思議そうに見上げてくる鈴仙に対し、輝夜はさも何でも無さそうに小首を傾げて見せる。そのついでとばかりに、横になつて自分の膝枕の上に頭を乗せる鈴仙の喉をこそぐつた。

「ひゃあん……！」

びくつとし、変な声を出しつつも抵抗する素振りはない。それは慣れたものだからであり、鈴仙は輝夜のペットであるから、当たり前前のスキンシップである。

それから輝夜はペットのくしゃくしゃとした耳を弄り弄りして妙な声を出させながら、自室の天窓をゆるゆると見上げた。

差し込む月光が僅かでも映えるよう、いつものように室内の灯りは消されている。薄闇の中を慎ましげな光が柔らかく輝夜に降り注いでいた。

穢れた地から見上げる故郷の、げに麗しき事よ。

鈴仙の耳を矯正するようにしごき、心なしか彼女の

足が伸びつつ微癢びげいれん擧あげているのを無視して、輝夜は長く、ゆっくりとした息を吐く。

溜息とも付かないそれは、目尻に少し涙を浮かべた鈴仙が目を瞬かせるには充分だったが、学習したのか今度は何も言わなかった。

輝夜は膝の上のペットの頭を好きに弄りつつ、何となく思い出していた随分昔の事を再度思う。

偶然が折り重なったあの必然は、要するに私が原因であり、だから私は永琳共々こうなってしまうのであって。恐らく永琳はその後の事を憂慮うれして、罪滅ぼしの名目で私の後を追ったのでしようけれど。

「……やっぱり、もうちよつと後先考えて行動するべきだったかしら」

永遠の時間。

時の終わりを知る為だけに得るといふのは、無知無謀愚劣愚策の極みだつたらう。

少し考えれば分かる事とはいへ、それでも当時の私は終わりを知る事が出来るというその一点に恋い焦がれ、他の全てが分からなくなっていたのだ。そんな当時の自分を擁護するつもりは更々ないし、蓬菜の葉によつて慢性的な刺激不足に陥おとつた昨今では、先程のように後悔を覚える事など幾百回いくひゃくかいだろうか。

無聊ぶりやうの慰めなぐさを求める日々は、退屈なりに退屈ではな

いが、それはそれでちつとも面白くない。

もつとも、つい最近の騒動以後はそれなりに面白みがあると言えたが……それでも、あれやこれやと引つ張つた所で五年もすれば飽きてしまうだろう。

環境や状況の変化による退屈あせきが長持ちしない事くらいは重々理解している。

とどのつまり、永遠と言ふのは退屈が付いて回るものであり、それを如何に巧くあしらい続けるか、或いは上手に付き合うかという事が肝要だ。

元々月人であつたから、その辺りについては不得手では無いけれど。でもそれは周囲にも同様の月人がいるからこそだと考えた。傍そばに同類がいればこそ、長生きも苦にならないというもの。

さてその長生きに必要な私の同類、蓬菜人は自身を含めてたつたの三人。一応退屈あせぎを続けるには十分な人数だけど、内一人がいつまでたつても非友好的態度を貫いてくれるのには困つてしまう。

その彼女と一度面と向かつて事情を説明し、あなたのそれは言うなれば逆恨みによく似ている、と指摘したのが拙ちかつたか。……間違つてないのに。

「……………まあ、それはそれとして」

敢えて口に出し、輝夜は脱線した思考を元に戻そうとする。